

久保 榮全集

6

久保

第6卷 評論

三一書房

一九六二年六月三十日 第一版発行

久保 栄全集 第六卷 定価一、四〇〇円

◎ 久保 マサ

一九六二年

検印
廃止

発行者 田 畑 弘

発行所

株式会社 三一書房

東京都千代田区神田駿河台二の九
電話 東京 〇九五八一―五番
振替 東京 八四一六〇番

印刷所 暁印刷株式会社

製本所 橋本製本所

丑丁・落丁本はおとりかえいたします

久保栄全集
第六卷

目次 第六卷

一九三三年

「五稜郭血書」覚え書	二
「築地」第十年を迎えて	三
——日本演劇の特殊性の概観——	
社会主義リアリズムの輪郭	三
築地の暦	七
ソヴェート演劇とわれわれ	四
歴史と歴史文学	四
シェークスピアの現代的評価	五
「織工」における否定的リアリズム	六
「吉野の盗賊」の作と演出について	六
永田衡吉君に答う	六
——「吉野の盗賊」の劇評の批評——	
新劇への提唱	七
シルラア的方法と「吉野の盗賊」	七

蝦夷漁民一揆ノート 四

一九三四年

前進座に与える言葉（アンケート） 六

劇評の権威のために 六

——永田衡吉君の迷論——

「街の風景」の演出について 七

「こわれた瓶」翻案おぼえ書 七

「父帰る」「同志の人々」演出覚え書 七

カイザアの人と作 九

「五稜郭血書」について 一〇

「五稜郭血書」のこと 一〇

「五稜郭血書」自序 一〇

「ベルス」そのほか 一〇

トーカー連鎖劇 一四

一九三五年

迷えるリアリズム 一七

——新劇のために——

新劇・その劇団・その俳優 一六

昭和十年度劇界への指針（アンケート） 一五

「中国湖南省」前書 一五

社会主義リアリズムと革命的（反資本主義）リアリズム 一七

——前者の中野・森山の歪曲に対して——

十部作（アンケート） 一八

「ファウスト」の上演に先立って 一八

リアリズムの一般的表象 一九

「ファウスト」演出のおぼえ書から 一九

リアリズム演劇の系統的上演 二〇

——「ファウスト」上演に先立って——

一九三六年

神と科学との争い 二五

昭和十一年度劇界への指針（アンケート） 二六

劇壇の四ツの謎（アンケート） 二七

「夜明け前」プログラムの端に 二八

「夜明け前」演出者のことば 二八

批判的リアリズムの批判 二九

火山灰地を踏む 二九

演出 三〇

「群盗」おぼえ書 三〇

新劇の回顧	一五
-------	----

一九三七年

昭和十二年度劇界への指針（アンケート）	一九
大衆劇とインテリゲンチヤ	二〇
ノアの方船	二〇
不自由ヶ丘	二一
上演戯曲をめぐって	二二
演出部会メモ	二二
モスクワと東京の「アンナ・カレーニナ」	二六
「火山灰地」作者から	二七

一九三八年

翫右衛門走り書	二五
こういう戯曲は書きたくない	二五
掌のなかの自叙伝	二四
「火山灰地」解題	二六
火山灰地書簡集	二五
火山灰地書簡集・第四信（草稿）	二七
「火山灰地」登場人物の横顔	二六
佐藤氏の評へ一言	二七

誤れる類推 二六八

——布施氏の「火山灰地」評へ——

劇評よ誠実であれ 二五二

——ふたたび布施氏に答える——

演出以外の演出 二五六

「夜明け前」演出おぼえ書 二九六

一九三九年

「本年の新劇に対する希望」のうち 三一九

新劇の正しい見方 三三一

歴史劇の形象 三七七

新ファウスト考 三三〇

「ファウスト」の翻訳 三九五

「ファウスト」再演にあたって 三九七

「ファウスト」劇評へ 四〇一

生きている小山内薫・万歳！ 四〇二

歌舞伎とリアリズム 四〇四

「神聖家族」断想 四二五

トラアと新劇 四四三

「新劇の書」序に代えて 四四四

札幌と新劇	四六
「海援隊」のドラマトルギー	四五
新協・一九三九年	四三
一九四〇年	
築地小劇場の回想	四七
演劇時評に代える日記抄	五〇
脱皮せよ、左団次	五三
一九四三年	
「ファウスト」第一部解説	五五
一九四四年	
新協劇団についての対話	五五
解題（内山 鵲）	五二
解説（本多秋五）	五三

評

論

(一九三三——一九四四)

一九三三年

「五稜郭血書」覚え書

この作品は、いわゆるスタンダード劇としては、私の五つ目の制作である。一九三〇年に新築地に上演された処女作「新説国姓爺合戦」、三年に大阪の構成劇場と葉つ葉服劇団が住友争議応援のために上演した「漁民」、三二年左翼劇場の九月から十一月のカンパのために執筆した「中国湖南省」「逆立つレール(第一部)」。そして、この「五稜郭」である。そのほかに、「五月近し」「ドニエプル発電所」以下の長短アジ・プロ劇十篇ほど、「パン」「青酸カリ」「謹賀新年」「トルクシブ鉄道の建設」等のアレنج、「日の出前」「織工」以下十種ほどの戯曲の翻訳、IATBの紹介論文その他、これらが旧築地以後の私の文筆活動の総計である。

そして、今度の「五稜郭」は、この期間において、しばしば劇場人としての多忙な仕事のために中断されながらも、年余にわたって根気よく執筆を続けた努力の作であり、これがわれわれの文化運動

の根城「築地小劇場」の第十年記念という輝かしいカンパニアに脚光を浴びることは、最も喜びとするところである。

要するに、この戯曲は、現在の支配体制の礎が置かれた重要な時期であり、またブルジョア演劇が自己の反動的役割を果たすために好んで取り上げる題材であるところの「明治維新」にたいする、われわれの側からの芸術的解明の一つの試みであり、従来われわれの作家によって、ほとんどまったく閑却されていたこの未墾地にむかって打ち込んだ一つの小さな鍬である。現在の支配体制が七十年の昔、どういう政治的経済的要因によって打ち樹てられたか、どういう権力と権力との結びつきによって確立されたか、それは単なる資本家地主政府であるかないか、また先進帝国主義の手による最初の世界分割の過程がほとんど完了し、ただ極東のみが彼らの植民地争奪、資本の侵略の争いのために残り残されていた時機に、そういう国際状況が明治維新にどう反映しているか、これらの具体的な分析解剖のために、私は筆をとったのであるが、しかし残念なことに、私は二百六十枚を費しても、この日本の南北戦争——官賊の闘争を充分に前述の意図を生かして形象化する技術を持たなかった。ただわれわれが当面の必要から、従来のわれわれの歴史劇よりも、はるかに飛躍した発展的形態において、史実を描かなければならないということ、われわれの歴史劇とは、任意の時代の階級闘争の姿を、あれこれと取上げるべきでなく、現代のプロレタリアートおよび一般被圧迫大衆にとって最も教訓を含んだ一時期を、全人類史の合法的発展の一環として描き出す時、決して現代的テーマを描いた作品に劣らない直接的な意義と効果を持つものであるということの、一つの示唆たり得れば、作者の労力の大半は酬いられたと言っている。われわれの同志たちは、この作品を一つの具体的な参考資料として、その厳正な批判の上に、われわれの新しいジャンルとしての歴史劇の問題を解決し、さらに実践にお

いてそれを推し進めてくれるだろう。

作者としては、すべてをそれに譲って、申しわけめいた言葉をこれ以上書き加えることを避けたいと思う。(六月十一日)

「築地」第十年を迎えて

—— 日本演劇の特殊性の概観 ——

*

「築地小劇場」第十年の記念カンパニアは、ここを根城として闘ってきたプロレタリア演劇の現在までの発展の姿を、またそれ以前のブルジョア的小市民的演劇が残したさまざまな仕事を回顧し、その再批判・再検討を、われわれの今後の実践に役立たせるための一つの契機を作るであろう。しかし、その際、われわれがただ「築地小劇場」のみを切り離して問題にしたのでは、得るところはわずかなのである。われわれは、この機会に、明治以降の新しい演劇運動が、日本資本主義の特殊的な発展を、どのように反映しながら今日に及んでいるかということを見きわめ、その科学的な究明を、われわれの当面する基本的課題と結びつけて考えなければならない。

ここでは、きわめて概観的にはあるが、今言った観点から日本の演劇の特殊性を、大掴みに述べ

てみたい。で、まず、例を默阿弥に取る。

*

「島衛月白浪」という有名な散切り物があるが、これは勧善懲惡に名を借りながら、実は一作ごとく惡の讚美をうたつてきた白浪狂言の名人が、その一世一代の書きおさめに、衷心から改悟して新政府の法の前に服罪する惡人を描いた、いわば作者自身の懺悔の作だと伝えられている。だが、はたしてそうだろうか？

默阿弥の散切り物が現れたのは、明治維新後のいわゆる絶対王政の時代である。一般的に言うところの絶対王政期に現れるブルジョアジーの芸術は、専制勢力の支持者であると同時に対立者であるところの自己の階級の二重性をそのまま反映するのが常である。なぜと言えば、「王權は、それ自体ブルジョアの發展の一產物であつて、絶対支配を獲得しようとするその努力において、封建家臣団の分解を強力的に促進」(資本論)しながら、ブルジョア解放の條件であるところの封建的身分制度の廢除を敢行するが、しかし専制勢力そのものは、ブルジョア民主主義の究極の發展にたいする桎梏にはかならないからである。たとえばフランスの絶対王政時代には、官僚出身のラシヌ、コルネイユの代表する演劇が、この時代の貴族文化のイデオロギー的表現たる宮廷生活の讚美、封建的な美的精神の尊重、古代的な芸術法則への義務的な服従——たとえば演劇における「三一一致」——を特徴とするのにたいして、ブルジョア出身のモリエールは、一方に王政主義的な感情を鼓吹しながらも、他の一方では封建的な旧勢力の代表的タイプ——鬘をつけた放蕩者(貴族)と衣をまとった偽善者(僧侶)とにたいして、あらゆる嘲笑と憎惡とを投げつけることを怠っていない。